

2016年2月7日川越教会

## 死で終わらない命

加藤 享

### 【聖書】ヨハネによる福音書 1 1章 1～4 4 節

#### ◆ラザロの死

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまずくことはない。この世の光を見ているからだ。しかし、夜歩けば、つまずく。その人の内に光がないからである。」こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。

#### ◆イエスは復活と命

さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあつた。マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

#### ◆イエス、涙を流す

マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだらうと思い、後を追った。

マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。

#### ◆イエス、ラザロを生き返らせる

イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

### 【序】 スチュワードシップ月間を迎えて

今月はスチュワードシップについて学び合う月です。**スチュワードシップ？**  
—— 聞きなれない言葉ですね。でも私たちはスチュワードネスならよく知っています。旅客機の乗客の世話を一切まかされて、乗客の楽しい旅行のために仕える人たちです。このスチュワードネスの男性名詞がスチュワードですから、「スチュワードシップ」とは、「**他の人の人生の良いスチュワードになる心構え**」とでもいえまじょうか。

聖書では「管理人」「家令」と訳されている語ですから、「**神の家の良い管理人としての道**」を意味しています。すると神の家、即ち**教会の良い奉仕者**になっていく心構えを学ぶと言うことになります。ところが或る人が、神の家を

自分の体と受け取り、「神が私に貸して下さった小さな家の良い管理人の心得」と表現していました。

借家なら毎月きちんと**家賃**を支払わなければなりません。これが神への**献金・奉仕**でしょう。しかし家賃を支払っていても家は私の家ではなく家主の所有物であり、損なわずにきれいに管理して暮していく義務があります。すなわち私の体を、**神から貸し与えられている家**として、良く管理して生活していかなければなりません。どのように私の体を管理して暮していくか、神のご意向を絶えず学びつつ、大事に用いて生きていかなければなりません。

私は生まれつき**丈夫な身体**を与えられました。そこで小学校5年の時にツベルクリンが陽転したのに、医者**の忠告を無視して暴れ回り、肋膜炎になり1年間休学**。しかし中学に入ると敗戦後の混乱期で、先生も食べることに精一杯。そこで毎日グラウンドで野球を思う存分楽しんで毎日を過しました。するとやがて咯血して、左の肺を手術。**6年間の療養生活**を余儀なくされました。

しかしこの愚かな失敗を通して、身体を**気まま勝手に**使ってはならないこと、神さまから貸し与えられている体なのだと自覚させられました。そして**健康管理**の大切さを学び、病弱な人への**思いやり**も、多少持てるようになりました。そして牧師になり、教会員の皆さんに少しでも楽しい人生を送っていただく**スチュワードの働き**を、今日までさせていただけようになったのでした。有難いことです。

老いてきました。しかし神さまから貸し与えられている家を最後まで大切に管理して、生きていかなければなりません。今年今年で、そのための学びをしっかりとしなければと思っています。スチュワードシップを、「**教会員として神の家の良い管理人になる心構え**」と受け取る前に、キリストの救いにあずかった一人の**信仰者としての心構え**を再確認していきたいと思います。

### [1]ラザロの甦り

さて今日は、**ラザロの死と復活**について、44節にわたって長い記事を司式者に読んでいただきました。そして大事な要点に集中して、メッセージをお取次ぎさせていただきます。主イエスは、兄弟ラザロの病気が重いという**マルタ、マリヤ**姉妹からの知らせを受けた時に、「**この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。**」とおっしゃって、直ぐに駆けつけようとはされませんでした。

人は皆死にます。私たちが例外なしに経験することと云ったら、それは**唯一つ**しかありません。**死ぬこと**です。この世に生まれた瞬間から、死に向かって歩き出す——これが**私たちの人生**です。ところが葬儀に際して「ご不幸をお悔やみ申し上げます」「ご愁傷（お気の毒）さまです」と挨拶します。

でもよく考えると、これは**おかしい挨拶**ではないでしょうか。私たちの死が「ご不孝」「お気の毒」だとしますと、私たちは皆、**ご不孝、お気の毒という終局**に向かって生きていることとなります。懸命に学び、働き、愛し合って生涯を送っても、ご不幸、ご愁傷でくくられてしまう人生——このような**死の受けとめ方**は、おかしいのではないのでしょうか。

主イエスは、ラザロが死んで4日後にベタニヤを訪れました。そして弟との死別を悲しむ姉のマルタに「私は復活であり、命である。わたしを信じる者は、**死んでも生きる**。生きていてわたしを信じる者はだれも**決して死ぬことはない**」とおっしゃいました。涙を流して「ご不幸」「お気の毒」という言葉しか語れない遺族や友人たちに対して、「**死んでも生きる**」「**決して死ぬことはない**」と主がおっしゃる信仰を、私たちはあらためて確認したいものです。

妹のマリアも、イエスを見るなり足もとにひれ伏して、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は**死ななかつたでしょうに**」と言って泣きました。彼女に付き添っていたユダヤ人たちも**泣きました**。それを見て主イエスは、「心に憤りを覚え、興奮して、『どこに葬ったのか』と言われた。」と聖書は記しています。人をただ嘆かせ、悲しませる**死の横暴さ**への激しい憤り、そのような死を**決然と否定**されたのです。

人々は主イエスを墓に案内しました。墓は洞穴で、石でふさがれていました。「その石を取りのけなさい」と主が言われると、マルタが、「主よ、**四日**もたっていますから、もう**においます**」と答えています。どうして主は直ぐにラザロのもとに来られなかったのか——それは人間の手では、もうどうしようもない**死の現実**をはっきりさせた上で、甦らせるようにとの**神の御心**を自覚されたからに他なりません。ですからマルタたちの知らせを受けた時に、「この病気は死で終わるものではない。**神の栄光のためである**。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」とおっしゃったのでした。

そして「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と答えるマルタ

に「もし信じるなら、**神の栄光が見られる**と言っておいたではないか」と言われたのでした。そして天の父なる神に祈られると、「**ラザロ、出て来なさい**」と大声で叫ばれました。すると死んでいたラザロが、顔を覆われ、手と足を布で巻かれたままの姿で出て来たのでした。そしてこの奇跡を目撃したユダヤ人の多くは、**イエスをメシアと信じた**のでした。

## 【2】主イエスの十字架の死

ベタニアはエルサレムの郊外です。この出来事は直ぐにユダヤ教の指導者に報告され、**最高法院**の会議が招集され、大祭司によって**イエスの死刑**が決議され、逮捕命令が下りました。これがヨハネ福音書11章の記事の全容です。そして12章に入りますと、ラザロの家での祝いの会食の場面で、マリアが純粋で非常に高価な**ナルドの香油**1斤(340グラム)を全部主イエスの足に塗り、自分の髪で足を拭いています。

弟子の一人ユダが「なぜこの香油を300デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」と非難しました。1デナリオンが労働者1日の賃金ですから、当時としては大変な金額です。恐らくマリアは、結婚の持参金代わりに親から与えられていたのでしょう。しかし主イエスは「この人のするままにさせておきなさい。**わたしの葬りの日のために**、それを取って置いたのだから」と、マリアの思いを受けとめて居られます。

主はご自分の**十字架の死が間近に迫った**ことを自覚して居られます。即ちラザロを墓の中から甦らせるという業が十字架刑をもたらすことを、自覚しておられたからに他なりません。主はエルサレムのベトザタの池のほとりで、**38年間も病気で苦しんでいた人**を癒されました。しかしその日が安息日だったので、ユダヤ人の迫害が始まりました(5章)。**生まれつきの盲人**を癒したことで(9章)、イエスを**メシア**だとする者が増え出し、石で打ち殺される危険がつのり、エルサレムから遠くヨルダンの向こうに身を避けられました。

そこへエルサレムの近郊ベタニアのラザロの危篤の知らせが届いたのでした。もしラザロを死より救ったら、自分の十字架刑は決定的になります。主は祈りの中で、**救い主キリストとしての時が来た**ことを、はっきりと自覚されたのではないのでしょうか。そこで「**この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。**」と答えて、墓に葬られたラザロを蘇らせにベタニアに行かれたのです。

「ラザロ、出てきなさい」と大声で叫ばれた主イエスは、その時**ご自身**を十字架の死へ決然と**差し出された**のです。主がご自分の命を十字架の死に差し出すことで、ラザロは死から甦りました。**主がラザロの死をご自分に引き受けて下さったのです**。マリアは敏感な感受性で、主の決意を知ったに違いありません。そこで大事な弟のために**命を差し出して下さった**主に、大切なナルドの香油を全部主の足に捧げて、**感謝**を表したのではないのでしょうか。

主イエスは、ラザロのためばかりではありません。十字架にかけられて「自分を救え、そしたら信じてやろう」と口々に罵られながら、「**父よ、彼らをお赦しください**」と祈りつつ、私たち**全ての者の罪を我が身に引き受けて**、その罪を贖う死を遂げて下さいました。その主イエスを、神は三日目に復活させて40日間にわたり弟子たちの信仰を確立させ、天の御許に引き上げなさいました。

#### **【結】 今も共に生きて下さる救い主**

私たちは皆、この世に生まれた瞬間から、この世を去る日、即ち皆が言う**死**に向かって歩き出しています。そして葬儀に際しては、「ご不幸をお悔やみ申し上げます」「ご愁傷（お気の毒）さまです」と挨拶し合います。私たちは皆、**ご不孝、お気の毒という終局**に向かって生きているのでしょうか。懸命に学び、働き、愛し合って生涯を送っても、ご不幸、ご愁傷でくくられてしまう人生——このような**死の受けとめ方**は、おかしいのではないのでしょうか。

主イエスは弟のラザロの死を嘆くマルタにおっしゃいました。「わたしは**復活**であり、**命**である。わたしを信じる者は、**死んでも生きる**。生きていてわたしを信じる者はだれも、**決して死ぬことはない**。」

主イエスはラザロを墓から甦らせて、その代わりに、ご自分が十字架に死んで下さいました。そして三日目に復活して、弟子たちと40日間共に過ごして下さいました。そして再び来て下さり、私たちが栄光に輝く神の都に迎えて下さると約束して、神の御許に戻って行かれました。そして信じる者に**聖霊**を豊かに注いで、**今も共に生きて下さっています**。

墓から甦ったラザロはやがて、再び死にました。しかし以前のラザロとは違います。**主イエスの命を頂いたラザロ**です。「わたしを信じる者は、死んでも生きる」と言われるラザロなのです。

私たちも、今のこの身体をもって生きる地上の生涯が終わっても、この私が

消滅してしまうのではありません。私のために十字架に死に復活して下さった救い主が私と共に居て下さるのです。私たちは信仰によって、**永遠の命を生きるもの**にされているのです。

私たちはこれから主の晩餐式を守ります。「これはあなたがたのための私の体である」とおっしゃるパンと、「わたしの血によって立てられる新しい契約である」とおっしゃる杯を頂いて、十字架に死んで下さった救い主イエス・キリストが**この私と共に今も生きてくださっている**ことを確認します。

私たちの命は墓で終わりではありません。神の栄光が働く命を与えられ、神の御手の中で、キリストと共に生き続けるのです。何と嬉しいことでしょうか。神から与えられた命を大切に、神のご栄光を表わし参りましょう。**よいスチュワードになっていきましょう。**

祈ります：私にこのような身体をお与えになり、生きよとお命じになる恵みを感謝します。自分の思いではなく、絶えずあなたの御心を聞きつつ、あなたに喜んでいただける日々を過ごさせて下さい。マリアのようにナルドの香油を捧げて、感謝を表す者にして下さい。私たちの教会があなたのご栄光を現す歩みを続けることが出来ますように、一人一人を祝福して下さい。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。 アーメン